

「なく (て)」と「ないで」と「ず (に)」について — 言語研究と日本語教育 —

小林典子

要 旨

日本語学習者にとってどのような整理の仕方、説明の仕方が、明確で分かりやすいのかを追求する立場で、ナクテ、ナイデ、ナク、ズニ、ズ、に関する言語研究の変遷を概観する。これらに関する研究の流れは大きく二つに分けられる。すなわち、形態的な品詞論から出発した伝統的な国語学の流れと、それへの対論としてある意味的な差異の観点から追求する流れとである。前者はナイを一つの同じ品詞とは見なさない立場、後者はナイに前接する部分が状態性か動作性か、あるいは意志によって制御可能かどうかという立場から分析している。一方、教育的な立場に立てば、学習者にとっては、形態的な違いや、文型によって指導するほうが、分かりやすいのではないかという考えに立ち、そのための整理をおこなう。

【キーワード】 なくて、ないで、なく、ずに、ず

Review of *Naku(te)*, *Naide*, *Zu(ni)*: language research and language education

KOBAYASHI Noriko

【Abstract】 Preceding studies of *Naku(te)*, *Naide*, *Zu(ni)* are reviewed in order to find the appropriate explanation which is clearly and easily understood by learners of JSL (Japanese as a Second Language). The studies of this topic are divided into two main streams. One stream consists of the Japanese linguistic tradition and focuses on the morphological aspects of *NAI*. The other is made from the standpoint of semantic concern. The former does not regard various *NAIs* as one 'part of speech' but two or three different ones. On the other hand, the latter does not regard the various forms of *NAIs* as different but the same, and analyzes them from the viewpoint of semantic features of forms preceding *NAI* i.e., +/-stative or +/-controllable.

For the purpose of JSL teaching, the explanation should be easily and clearly understandable. A way of introducing this topic to learners is proposed, emphasizing the morphological differences and sentence patterns.

1. はじめに

日本語学習者は初級の段階では、新しく導入される文型ごとに、ナクテ、ナイデを決まりごととしてまず覚える。例えば、次のようである。

- (1) ここでたばこを吸わないてください。
- (2) Q：明日、来なくてもいいですか。A：ええ、来なくてもいいですよ。

つまり、学習者には、動詞の否定のテ形には二つあって、「～ください」の文型ではナイデ、「～てもいい」の文型ではナクテを使用すると説明する程度である。

また、学習者は、次のようなナクテも存在文、名詞文、形容詞文として学習している。

- (3) ヒーターがなくて、寒いです。
- (4) いいえ、そちじゃなくて、こちです。
- (5) テストはむずかしくなくて、よかったです。

その上、教師の自然な発話から次のような会話も耳にすることになる。

- (6) 明日、来ないでもいいですよ。来なくていいです。

このように学習者の頭の中には、様々なナクテ、ナイデが蓄積されてくる。さらに、中上級になると、これにズ(ニ)が加えられる。

- (7) 朝から、仕事にも行かず、家事もせず、ほんやりとしている。
- (8) 寒いのにコートも着ずに出かけていった。

しかし、学習者は、どのように整理し使い分けるのかわからず、混乱のままおかれている。

本稿では、日本語学習者にとってどのような整理の仕方、説明の仕方が、明確で分かりやすいのかを追求する立場で、ナクテ、ナイデ、ナク、ズニ、ズ、に関する言語研究の変遷を概観する。次のような対立に観点を置くことになる。

- A. ナクテとナイデの対立
- B. ナクとナクテの対立
- C. ズとズニの対立
- D. ナイデ/ナクテとズニの対立

その上で、日本語教材へどういさせるのか、検討したい。

2. 形態から出発した伝統的な見方

2.1 ナイの品詞論

伝統的な国語学では、形態的な違いからナイを一つとはみなしていない。

い形容詞、な形容詞、名詞文、+ ナイ (形容詞) 動詞 + ナイ (助動詞)

図1 ナイの品詞

図1のようにナイを形容詞と助動詞に区別するのが、伝統的、一般的である(白石1956、鈴木1976など)。それは、ナイのテ形ナイデが動詞のみにあり、名詞文、形容詞はナクテのみでナイデがないという分布の異なりに基づいている。「おもしろくない」「立派で(は)ない」のような「ない」は形容詞、「行かない」のような動詞の未然形につく「ない」は助動詞(白石1956: 163)と区別している。

一方、宮地(1964)はナイ・ヌ・ズは学校文法では動詞未然形につく否定の助動詞と扱うが、ナイには同形の形容詞があるとし、その比較をしている。宮地は図2のbを形容詞として扱うことに疑問を呈して、次のように述べている。

「独立しては用いられてはいず、もちろん他の形容詞との言い換えはできない。いわゆる助動詞〈行かない〉〈買わない〉の「ない」とのふり分けについていまいちど反省する必要はないだろうか。」

学校文法	宮地の提案
a 「花がない」→ 形容詞	形容詞
b 「花でない」「美しくない」→形容詞	助動詞
c 「行かない」→助動詞	一語の中の接尾語

図2 宮地(1964)から引用

宮地(1964)はナイをズ・ヌに言い換えられるのは動詞未然形に付く場合のみという観点から、bとcの「ない」を区別している。また、以下のような方言の比較からもその区別を裏付けている。

東京方言と京都方言の比較	
東京	京都
a 花がない	花がない
b きれいでない 美しくない	きれいやない 美しくない (美しない)
c 行かない	行かん (行かへん・行かず)

図3 宮地 (1964) から引用

佐治 (1982) は形容詞、補助形容詞と、動詞の否定形+接続助詞「て」の形と分けて考えているが、これは宮地の助動詞を補助形容詞と言い換えてはいるが、同様の考え方だと思われる。

鈴木 (1973) は、「形容詞系」「助動詞系」にナイを2分するという立場にたち、実例の中から中止法の用例の分析をして¹⁾、図4のように相補分布することを示している。

動詞	形容詞	しで	しが	上接語	下接語
○	×	×	×	ないで	
×	○	○	○	読点を伴うなく	

図4 形容詞系の「ない」と助動詞系の「ない」 鈴木 (1976) より引用

この表を言い換えれば、中止法の場合、存在文、名詞文、な形容詞文、い形容詞文では「ナク、」(形容詞系)が使用され、動詞には「ナイデ (助動詞系)」が使用されるということになる。

以上品詞論の立場からのナイデとナクテの分析を見たが、宮島 (1965: 96) は次のように述べている。

「動詞の否定の「～なく」という形は、「降らなくなる」のように「なる」につづくか、「たりなく」「たまらなく」のように形容詞化ないし副詞化しているかのどちらかで、中止法はない。」

助動詞系、つまり、動詞に付いた場合でも、ナクテでなければならないものとして、益岡 (1997 p.15) も、(9)のような例文をあげている。しかし、これも (9') のような中止法では

言えない。

(9) 雨量が足りなくて、貯水地の水が減少した。

(9') ? 雨量が足りなく、貯水地の水が減少した。

2.2 後接するものからの分析

前節での品詞論はナイの前にどのようなものが付くのか、そして、そのためにナイのテ形はどのようなのか、という形態からの分析であった。次に、ナク(テ)、ナイデ、ズ(ニ)などの後にどのようなものが付くのかという観点から見ていこう。以後、筆者もナイを区別して、鈴木木の「形容詞系」「助動詞系」という用語を使用することにする。つまり、動詞に付くものを助動詞系、それ以外に付くものを形容詞系とし、助動詞系にはナイデ、ナクテの二つの形態、形容詞系にはナクテのみという考えに立つ。

2.2.1 助動詞系への後接形態

形容詞系のナイについては、ナクテの形のみで、ナイデ、ズ(ニ)はないので、学習者にとっても、混乱はおこらない。そこで、助動詞系のナイのナク、ナクテ、ナイデ、ズ、ズニについてその後接する形態を見ていく。第1節で述べた各対立にそって、記述する。

A. ナクテ vs ナイデの対立

a. ナクテ/ナイデ どちらでも使用可

ナクテ/ナイデ + 話者の“judgment or emotional states” (MacGloin1976)

((モ) イイ/スム/コマル/ダイジョウブ/サビシイなど)

b. ナイデのみ使用可

ナイデ + 補助動詞

(イル、アル、オク、イク、クル、アゲル、モラウ、クレル (クダサイも含む))

c. ナクテのみ使用可

A. aの表現は、よりナクテの使用が一般的とは言える。特に、次のようにハが付いた場合はナイデでは落ち着きが悪く感じる。

ナクテ + ハ → 条件の用法 (ナクテハナラナイも含む)

(10) がんばらなくては合格できないよ。

鈴木 (1976) は、動詞につく助動詞としてのナクテに状態動詞が上接すると、原因・理由を表すことが多いが、動作動詞が上接すると仮定条件を示し、ナイナラバの意味になると述べている。

B. ナク vs ナクテの対立

この対立は形容詞系で問題になるが、助動詞の場合も対立がないわけではないので、以下に整理する。

a. ナクを使用して、ナクテは使わないもの

ナク + (ナル、スル/サセル)

ナクはほとんどが～ナクナルという使い方 (11) だが鈴木 (1976) の調査ではそれ以外が2例だけあったとし、(12) (13) を示している。

(11) 降らなくなる。(宮島1965:96)

(12) しかし、やはりつやが足りなくはないか。(鈴木1976)

(13) この目が……彼を眠れなくさせたのだ。(同上)

これら、「足りない」「眠れない」は状態を表す形容詞的な意味合いがあると言える。また、(13)のようにスル/サセルという使役構文ではナクを使う。

b. ナクテを使用して、ナクは使わないもの

助動詞系のナクテはA, a., c. で取り上げたものに使用が見られる。また、「ナク、」という連用中止の用法はなく、これに対応するのは「ズ、」ということになる。

しかし、形容詞系であれば、(14) のような並列的な用法にナク、(15) のような連用修飾用法にはナクテという使用傾向がある。

(14) 暑くもなく、寒くもなくちょうどいい気候だ。(並列)

(14')? 暑くもなくて、寒くもなくてちょうどいい気候だ。

(15) 安くなくて、買えない。(理由)

(15')? 安くなく、買えない。

C. ズ vs ズニの対立

この対立については、あまり注目されておらず、文献でも取り上げているものが少ない。後接形態として決まったものはなく、次節で扱う主文との関係が従属的か独立的かという対立に注目する必要がある。学習者に対しては、次の2点の形態的な指導が必要になる。

- ・シナイデ → セズ (ニ)
- ・シテイナイデ → シテオラズ

また、B, b, で述べた関係と似ていて、並列的な用法にズ、連用修飾用法にはズニという使用傾向がある。

D. ナイデ/ナクテ vs ズ/ズニの対立

ナイをズ、ヌに言い換えられるのは動詞の場合のみであるため、ナクテではなくナイデをズニと対応させる記述が一般的である。例えば Alfonso (1969: 506-509) は「Vズニ」は「Vナイデ」のフォーマルな表現であって、「Vナイデ」と全く同じであると記述しているが、学習者向けの記述のためだとしても乱暴ではないだろうか。

ナイデクダサイ、ナイデホシイなどはズニクダサイ、ズニホシイとは言い換えられない。補助動詞や補助用言に続く場合はナイデのみで、それ以外のナイデはほとんどズ(ニ)に言い換え可能とすべきだろう。

また、ズ(ニ)は慣用句として表現形態が固定しているものも多い。

2.2.2 後接する主文との関係

テ接続について宮島(1965: 85)は次の4つに分け、2)～4)については、「連用形にはない用法である」と述べている。つまり、テ形は1)～4)になるが、連用中止形は1)のみの用法としている。

- 1) 接続(中止的用法)
- 2) 補助動詞への接続
- 3) 依頼(「助けて!」の類)
- 4) 主張(「柔軟性があってよ」の類)

そこで、1)の用法について、後接する主文との関係を見てみよう。仁田(1995)は、「S1テS2」の中のそれぞれの述語の意味的な性質、特に、生起時関係、異主体かどうか、制御可能かどうかなどを見ながら、テ接続の意味機能を詳細に分析したものである。仁田はテ接続を整理して、4つのタイプにまとめて論じている。なお、2)と3)は「継起」の下位区分としている。

- 1) 付帯状態(主たる事象の実現のし方)
- 2) 時間的継起(時間的先行関係)
- 3) 起因的継起(起因的事象)

4) 並列

益岡 (1997) では、動詞文だけではなく形容詞文も含めた以下のような6つのテ接続の用法を挙げている。

- 1) 単純並列 (あの店は安くておいしい)
- 2) 継起 (喫茶店で朝食を取って職場に行った。)
- 3) 原因 (問題が難しくて答えが書けなかった)
- 4) 手段 (フェリーに乗って九州へ行った。)
- 5) 付帯状況 (皆で歌を歌って帰った。)
- 6) 条件 (そんなに高くては困る。)

益岡は1) 3) 6) において、形容詞の用例があることから、原則として、これらの用法にはナクテが使用されるはずだという論を進めている。これは、久野 (1983) の次の記述と同じ考え方である。

「動詞の「…テ」形を要求し、形容詞の「…テ」形を許さない文パターンでは、「Vナイデ」形しか用いられない。即ち、「Vナイデ」形は、動詞的否定形であり、「Vナクテ」は形容詞的否定形である。」

否定の中止法と連用修飾法の場合 (ナク (テ)、ナイデ、ズ (ニ)) には、益岡の上記6つに加えて、「代替」とでも呼ぶものを加わえていいのではないかと思う。

(16) 彼女は高校には行かないでカラオケに行っていたようだ。

そこで、益岡の挙げた6つに代替を加えた7つについて、ナクテ、ナイデ、ナク、ズ、ズニの使用が可能かどうか調べてみると、図5のようになる。図5は各接続形式とテ接続の機能との間の分布を形容詞系のナイの付く文 (名詞文、形容詞文、存在文)、助動詞系の付く動詞文を動作性の動詞文と状態性の動詞文に分けて、記入したものである。

状態性の動詞や形容詞などは付帯、継起、手段、といったものを考えるのは難しく、どれも原因になるようである。これは、肯定のテ接続においても状態的な述語の場合、因果関係を示しやすいと言われていることと同じである。

	ナクテ	ナイデ	ナク	ズ	ズニ
1) 単純並列	形?動×状?	形×動?状?	形○動×状×	形×動○状○	形×動?状×
2) 継起	形×動×状○	形×動○状○	形×動×状×	形×動○状○	形×動○状○
3) 原因	形○動○状○	形×動○状○	形?動×状×	形×動○状○	形×動?状○
4) 手段	形×動×状?	形×動○状×	形×動×状×	形×動○状×	形×動○状×
5) 付帯状況	形×動×状?	形×動○状○	形×動×状×	形×動?状?	形×動○状○
6) 条件	形○動○状○	形×動?状?	形×動×状×	形×動×状×	形×動?状×
7) 代替	形○動?状○	形×動○状○	形×動×状×	形×動○状○	形×動○状○

形：形容詞系のナイの付く文で、名詞文、形容詞文、存在文

動：動作性の動詞文（飲まない、開けない、見ない 等）

状：状態性の動詞文（飲めない、見えない、～がない、 等）

図5 複文におけるナク(テ)、ナイデ、ズ(ニ)接続形式

図5の作成作業から、以下のことを得た。

- 1) 単純並列の場合は、形容詞系はナク、助動詞系はズである。
- 2) 継起は、否定の場合、原因や代替の意味になる。
- 3) 原因の場合は、ズニは座りが悪い。ズであれば言う。
- 4) 付帯状況の場合は、ズは座りが悪い。ズニと言う。
- 5) 動詞の場合、原因、条件はナクテ、単純並列はズ、それ以外はナイデかズ(ニ)である。
- 6) ナクという中止法は動詞にはない(ズを使う)。形容詞系の単純並列か原因の用法でのみナクを使用する。

主文と従属節との従属度の強さ（切れ目が大きいか、小さいか）という観点から、鈴木（前掲）はズはズニやナイデよりも切れ方が大きく、ズニのほうがナイデの用法と近いとし、以下のように述べている。

「要するに、「なくて」や「ないで」は「て」「で」がつくことによって、下の語句への係り方がより強くなり、それを承ける語句と緊密に結びつくのに対し、「ず」はその下での切れ方が大きく、もっとゆるやかに下の語句と結びつく。……………（「ずに」は）「ず」よりも「に」が付くことによって副詞性が増大したとみることが出来る。「ずに」の下での切れ目は「ず」より小さく、より緊密に下の語句と結びつく傾向にある。その点で、「ず」よりも一層「ないで」の用法に近い。」

つまり、ナクテ、ナイデ、ズニに比べて、ナク、ズというのは切れ目が大きいというわけで、従属度との関係がどうなっているのかの分析も必要だと思われるが、本稿ではそこまで立ち入る用意がない。単純並列において、ナクテ、ズニよりもナク、ズの方が使われることは、切れ目の大きさと関係がある。南 (1974: 128) の第14表では、ナイデ、ズ (ズニ) は同じB段階に分類されており、ズ、ズニの間の違いについては、言及されていない。

3. ナイを品詞に分類せずに意味機能で分析する立場

国語学の伝統的な研究の流れがナクテとナイデ、ズの形態的な違いに観点を置いてなされてきたのに対して、述語が *stative* かどうかという述語のタイプと否定の意味によって分析しようと試みているのが、MacGloin (1976) である。MacGloin は “I would like to show that '*Nakute* and *naide* is not simply morphological but semantic, and that both of them can be derived from an underlying NEGATIVE.’” と述べ、以下のような主張をしている。

- 1) “*te* complement constructions” (「-ている」「-てあげる／くれる／もらう」「-てくる」「-ていく」「-てほしい」など、いわゆる補助動詞のようなものを指している) は「ないで」のみ。
 - 2) 主文の述語が「いい」「済む」「困る」「大丈夫」「淋しい」など S 1 の結果に対する話者 (この場合、主文の主語は話者でなければならない) の “judgment or emotional states” の場合には「なくて」「ないで」の両者が使える。
 - 3) S 1 と S 2 の主語が異なる場合にも「なくて」が使える。
- (16) P T A にはお母さんが行かなくて／ないで、お父さんが行った。(MacGloin)
 (17) P T A にはお母さんが行けなくて／ないで、お父さんが行った。(同上)
- 4) S 1 と S 2 の主語が同じ場合は、S 1 の述語が “*stative*” な動詞か形容詞の場合には「なくて」も許される。
- (18) 太郎は英語ができなくて、しぶしぶ英語塾へ通った。(MacGloin)
 (19) 家にはいられなくて、家出した。(同上)

しかし、上記の記述のうち、(16) の例では、ナクテは落ち着かず、ナイデの方が自然なのではないだろうか。また、(17) では、ナイデは落ち着かず、ナクテが自然だと感じる。MacGloin (1976) は上記をまとめて、以下のような表にしている。

subject	V 1	Relation between S1 and S2	<i>Nakute</i>	<i>Naide</i>
Different	stative	symmetrical/causal	yes	yes
	nonstative	denial/symmetrical/causal	yes	yes
Same	nonstative	symmetrical/denial	no	yes
	stative	symmetrical/causal	yes	yes

Denial=denial of expectation

この MacGloin の論を受けて、北川 (1976) は、McGloin (1972) を次のように紹介している。

「もう一つ注目すべきものに McGloin の論文がある。そこでは「なくて」も「ないで」も本来同じものであって、その違いはただ話し手の意識に原因結果という因果観念が主に働く場合それを反映する文に「なくて」があらわれ、そうではなくて話し手が自分の期待に反したという意味をこめながら否定の感じを強く打ち出すような場合に「ないで」が使われるとされている。」

北川 (1976) は MacGloin の期待の有無という論の弱点を批判しながらも、V 1 と V 2 の主語の異同、動詞が意志動詞か無意志動詞かという点から記述しており、これは、MacGloin の流れを組むものである。MacGloin において “stative” “nonstative” という対立で考えているものを意志動詞か無意志動詞かという別の観点から見直したものと見えよう。また、この意志性に関しては、北川は Kuno (1973) の “self-controllable” という概念を引用している。Kuno (1973) では、self-controllable かどうかによる verbals の 2 分によって、シ接続とシテ接続を検討している。後に、戸村 (1986) もこの流れを受けて、“controllable” かどうかという観点から、ナクテとナイデについて記述を試みている。

以上見てきたように、否定の接続形式の研究には、日本国内での伝統的な国語学からの研究の流れとは別に、アメリカで行われた研究からの流れがあったことが分かる。

4. ズの使用傾向

日本語教育の現場では文法について、学習者に分かりやすい簡略な説明が求められる。そのため、ズは書き言葉で使用し、話しことばではナイデを使うというような簡単な導入をすることがある。実際、鈴木 (前掲) の調査では、「ず」は会話よりも圧倒的に地の文で使用されていると、指摘している。

しかし、使用の頻度は少ないかもしれないが、実際にくだけた会話でもズは使用されている。それは、先にも述べたズの使用傾向から次の理由にまとめられるだろう。

- 1) ズは慣用句に多く残っており、固定的な表現なため、話し言葉の中であってもナイデには変えられないものがある。
- 2) 動詞の否定の連用中止形は存在せず（「動詞+ナク、」という中止形はない）並列的に述べたり、連用中止形で述べたりする必要がある場合にはズを使うしか方法がない。

4.1 慣用句に現れるズ

慣用句について、森田（1989）は次のように述べ、例をあげている。

「(1) ことわざ・格言の中に現れた「ず」……文語法の残存として化石的な形で残ったもの(2) 慣用的な言い回しの中に現れる「ず」……一つの言い回しとして表現形態が固定しており「ない」に言い換えることはできない。日常しばしば使われ現代語の「ず」はほとんどこの形式でなじみが深いと言っていい。」

「一糸乱れず／一糸まとわず／間髪を入れず／食うや食わず／……飲まず食わず 等」また、ほとんど一つの単語と同じような意味のまとまりとして「恩知らず／恥知らず／見ず知らずの人 等」副詞として一まとまりの語となっているもの「相変わらず／……知らず知らず／取りあえず」

このような表現はズをナイデに入れ替えることはできない。

4.2 否定の連用中止形

ナクテ、ナイデ、ズニはいずれも後接する節の述語に従属的に結びつく。これに対して、結びつきのゆるやかな、並列的な構造の場合には、ナクが形容詞文や名詞文に、ズが動詞文に、使われる。下の関係図に見るように、助動詞系のナイの連用中止形は存在しないためズが使われるのである。

		テ形	連用中止形
形容詞系	肯定	クテ	ク
	否定	ナクテ	ナク
助動詞系	肯定	シテ(動詞テ形)	シ(連用形)
	否定	ナイデ/ナクテ	ー
		ズニ	ズ

図6 関係図

- (20) 暑くもなく、寒くもない。
(21) ?暑くもなくて、寒くもない。
(22) 大学院にも合格せず、就職も決まらず、落ち込んでいる。
(23) ?大学院にも合格せずに、就職も決まらずに、落ち込んでいる。

(20) (22) のように並列的に述べる場合に (21) (23) のようにはあまり言わないのではないだろうか。

5. 日本語教育での取りあげ方

本節では、言語研究の成果を踏まえて、日本語教育でどのように扱っていけばいいのか、考えてみたい。

北川(1976)は学習者には「ないで」は動詞にだけあらわれるものと指導した上で、「どういふ場合に「なくて」が動詞とともにあらわれ、どういふ場合にそれが出来ないのかという」つまり「「なくて」の動詞との共立の際の制約されたあらわれ方」を指摘する必要があると結論づけている。学習者にとっては、より明示的な指標のほうが分かりやすいと思われるので、筆者も北川の意見に賛成である。否定のテ形全体に汎用性のあるルールがあれば、学習者の助けになるかもしれないが、汎用的であるものは抽象的になり、分かりにくいということがある。そのような、ルールの適用(前述した、MacGloinや益岡など)よりも、文型として覚えてしまうほうが、役に立つのかもしれない。このようなことを考えて以下に指導のための具体的な整理を試してみる。

1) 名詞文、い形容詞文、な形容詞文、存在文 → ナクテ、ナク

- ・本じゃなくて、ノートを取って。
- ・暑くなくて気持ちがいい。
- ・暑くなく、寒くなく丁度いい気候だ。(並列のときにはナクテが使えない)
- ・誰もいなくて、淋しい。

2) 動詞文 → ナイデ、ナク(テ)、ズ、ズニ

動詞文はナイデを基本とする。ナイデの場合は少々座りの悪い文になっても問題ではない。ほとんどの文型がナイデで言える。

- ・起こさないでくれ。
- ・閉めないでおいた。
- ・聞かないでほしい。
- ・まだ見つからないで／見つからずに／見つからなくて、探している。

- ・探さないでも／なくてもいい。

3) 例外的にナイデは絶対に使わないもの。

ナル、スル／サセルに付く場合はナクを使う。

- ・×行かないではならない。 →○行かなくてはならない。
- ・×煙草を吸わないでなった。 →○煙草を吸わなくなった。
- ・×買えないでさせた。 →○買えなくさせた。

4) どちらかというとなクテのほうが自然な文型。

条件や、因果に関係する文型では、ナクテが好まれる。理由を述べて、その後に感情表現、感謝、詫び表現などが来る場合は、ナクテ節は状態性であるか、主文の主語によってコントロールが出来ない場合が多い。

- ・行かなくてもいいですか。(条件)
- ・分らなくて、困った。(因果)
- ・まだやっていなくて、ごめんね。(詫び)

5) ナイデは補助動詞、やりもらい、などに付く場合以外の接続では、ズニに置き換えられる。

- ・心配しないでください。 →×心配せずにください。
- ・心配しないで勉強できた。 → 心配せずに勉強できた。

6) 動詞を並列的に述べる場合は、ズを使い、ナイデ、ナクテ、ズニは使わない。

形容詞を並列的に述べる場合は、ナクを使う。

実際には、上記の1)、2)を第一段階として順に、学習者のレベルや理解の程度にあわせて、6)までを指導すればいいのではないだろうか。中上級になっても学習者にとって1)2)のような情報整理は必要である。

6. おわりに

本稿では、言語研究の流れを概観し、これを日本語教育の現場にどう整理して活かすかを考えてみた。ナク(テ)、ナイデの使い分けについて質問が出てくるのは、中級になってからであり、ズ(ニ)について知るのも中級になってからである。初級においては、少数の文型として定着しており、学習者は迷うこともない。中級になって、混乱に気が付いたときの指針として、第5節で述べた整理が役に立つと考える。この整理をどのような練習をさせて学習者に定

着させるかが、日本語教育の現場に課せられた課題である。

注1. 現代小説8冊と小学6年の国語教科書、計9冊の資料で、読点の有無、会話文か地の文か、についても分析。その使用傾向を数値化している。

参考文献

- Alfonso, Anthony (1969) *Japanese Sentence Patterns*, Sophia University, Tokyo: 506-509
- Alfonso, Anthony (1966) *Japanese Language Patterns: A Structural Approach*, Sophia University, Tokyo
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge, Mass. MIT Press.
- MacGloin, Naomi Hanaoka (1976) Negation, Shibatani, M (ed.) *Syntax and Semantics* vol. 5, Academic Press: 371-419
- 庵功雄他 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(監修 松岡弘) スリーエーネットワーク
- 北川千里 (1976) 「「なくて」と「ないで」」, 『日本語教育』29号
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- グループ・ジャマシイ (編著) (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 佐治圭三 (1982) 「「しなくて」と「しないで」と「せずに」」日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店: 443-444
- 白石大二 (1956) 『日本口語文法』法政大学出版局
- 鈴木英夫 (1976) 「「なく(て)」と「ないで」と「ず(に)」の用法の異同について」『名古屋大学教養部紀要A (人文科学・社会科学)』20号
- 河村佳代 (1986) 「「～なくて」、「～ないで」再考」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』1号
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」『複文の研究(上)』くろしお出版
- 日高水穂 (1995) 「ナイデとナクテとズニ — テ形の用法を持つ動詞の否定形式 —」宮島・仁田 (編) 『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 宮地敦子 (1964) 「ない・ぬ、ず」『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院
- 宮島達夫 (1965) 「いくつかの文法的類義表現について」『ことばの研究』第2集 国立国語研究所編
- 森田良行 (1989) 「～ず」『基礎日本語辞典』角川書店: 541-543